

「すれました」

「エ、」

「すれたんや」

「なに、すれた、僅かのすれなら、金を呉れます、何程、すれました」

「たつた、八百五十——」

「仰山すれてますがな」

又も世話方が箱を載いて、ガラシと振りますと、子供が、錐をプツツと突差しますと、世話方が、其札を取りまして

「第二番の御富——」と聲が掛りますと、今迄惚氣を云ふてた人が

「モシ、どいとなはれ、是れから、私の番や、風呂へ這入つて一盃飲んで寝るか、うどんで済ますかの境目や、サア遣つて、辰やろ」

「辰の——」

「どんなもんや、八百か」

「八百——」

「甚いは、五十やろ」

「五十——」

「モシ、彼人、とうぐ祈り出しましたで、うどんや、おまへん、風呂へ這入つて一盃飲んで寝ますつせ」

「一番やろ」

「七番——」

「フワ——」

「——また平太張つたで此の人」

三番も突切りますと、大きな紙へ當りを書いて張出しますと、群衆ハ、潮の引いた如く、處へ参りましたのが、例の、空けつの親父さん、

「甚う人が、ドヤ／＼と、ウム、昨日宿屋の亭主が話をした、富やな、モシ、富は何うなりました」

「モウ、濟みましたで」

「濟みましたか、當りは」

「正面に紙に書いて張つてます」

「成程……フム立派に書きよつたな、一番が、子の千三百六十五番か、二番が辰の八百五十七番で、三番が寅の五百四十八番、宜い番號が出たあるな、干支頭に龍虎が勢の宜い物が出てるな、